

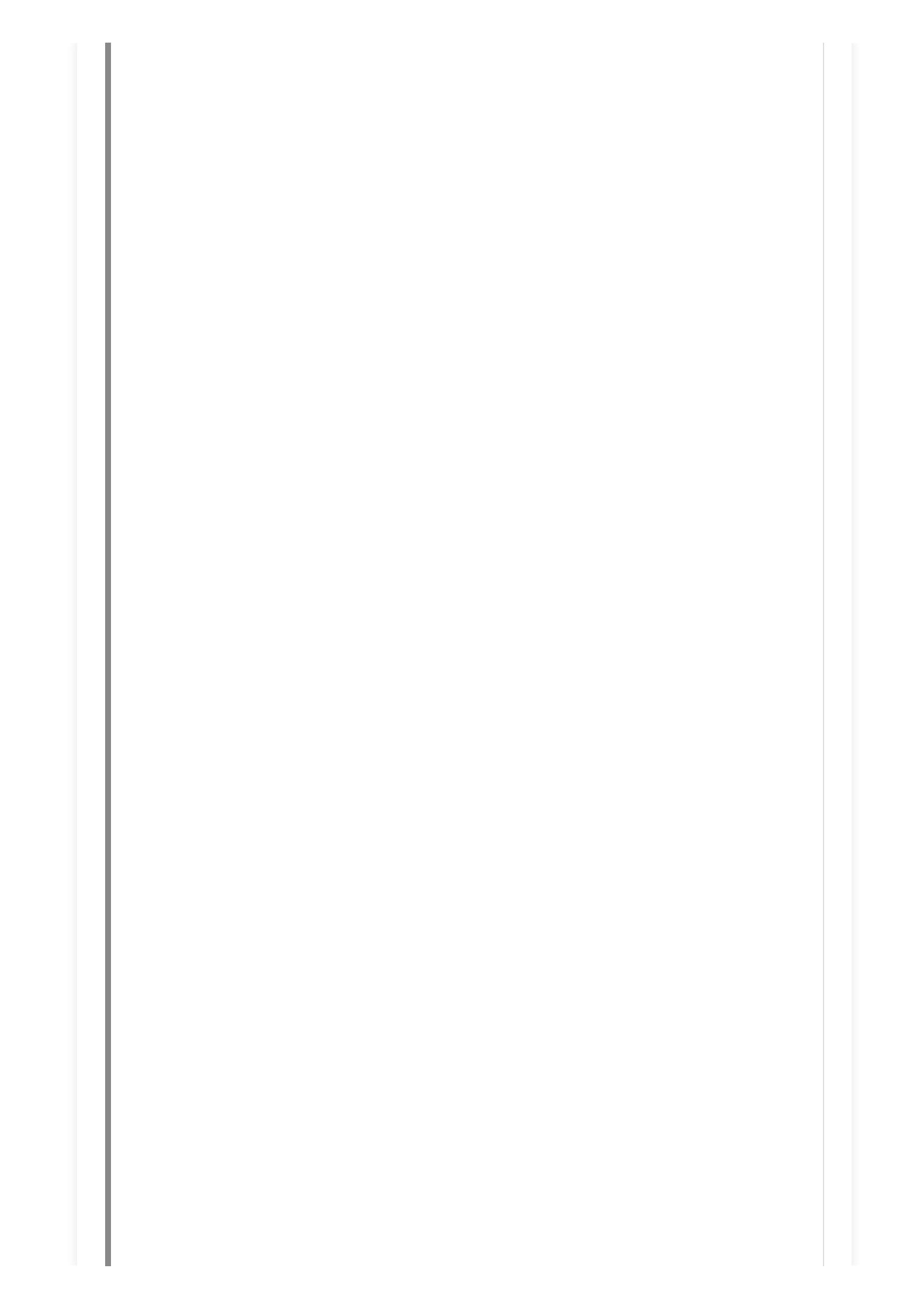
⇒ [dl.ndl.go.jp/pid/11](http://dl.ndl.go.jp/pid/11)

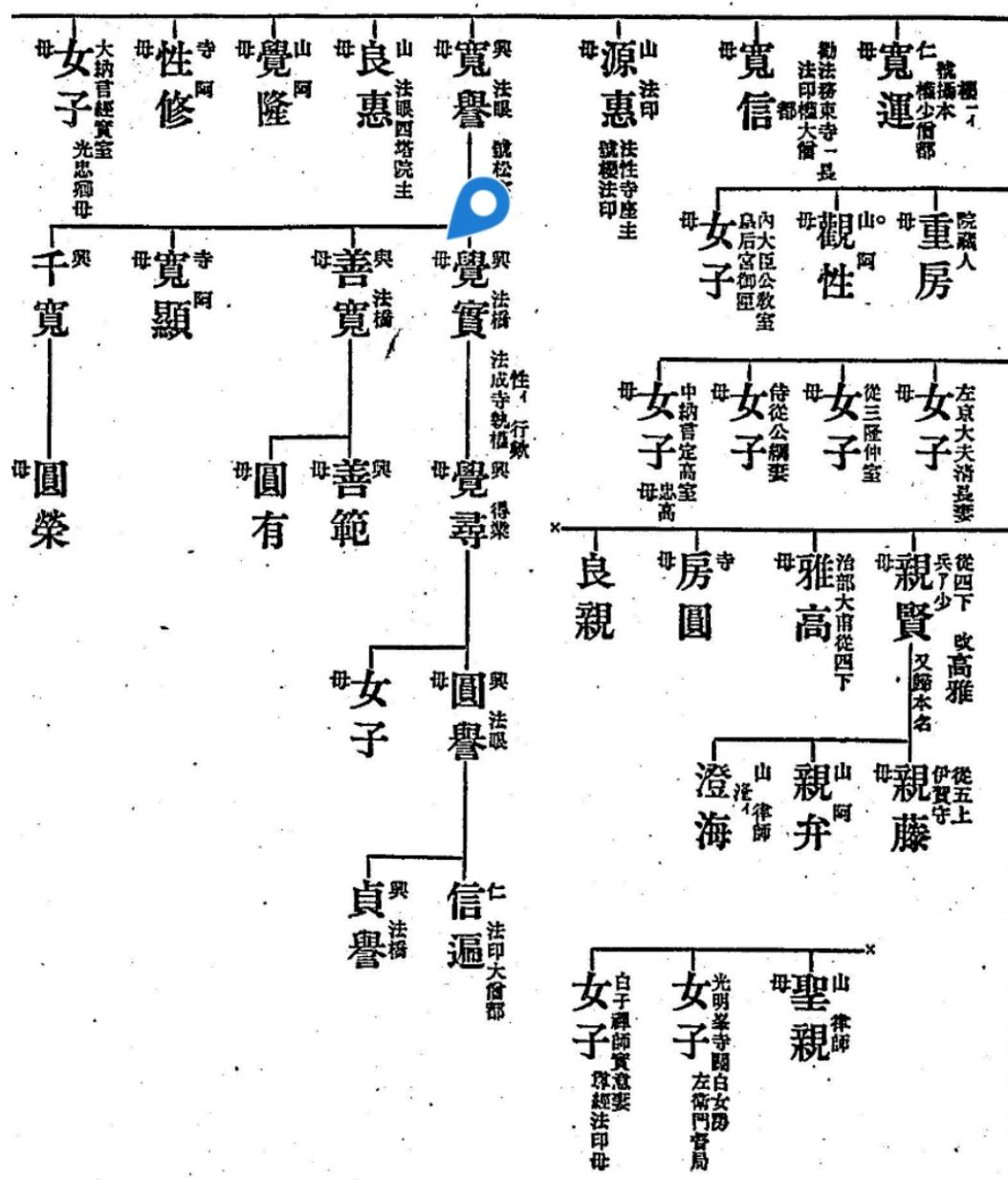
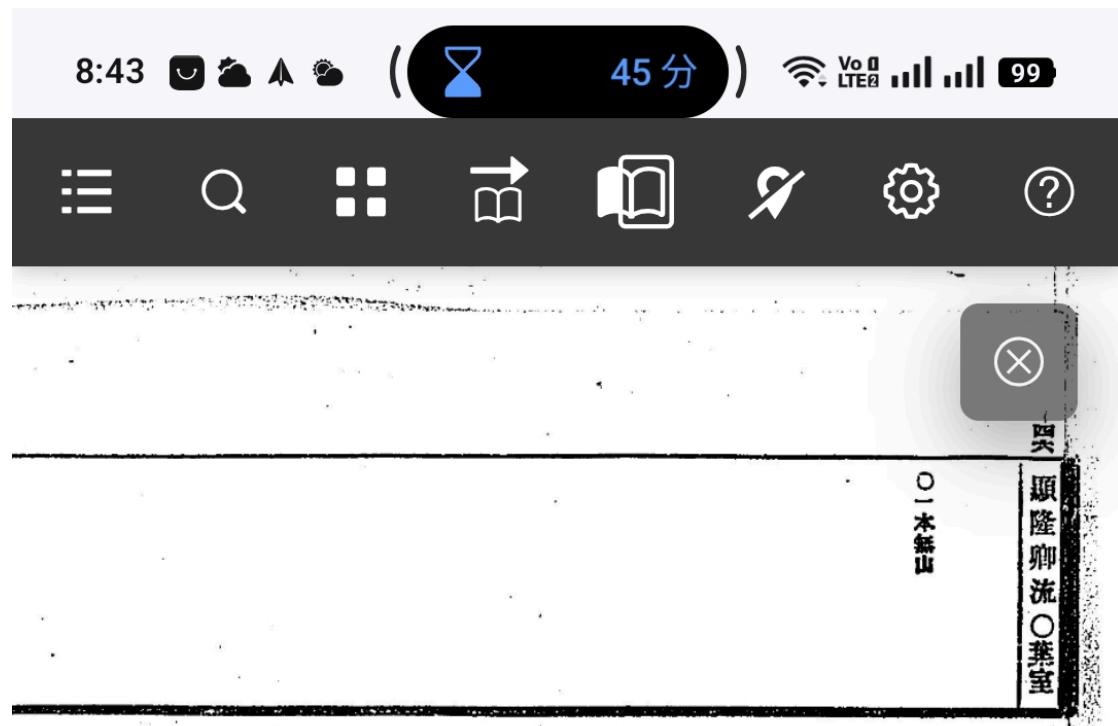
+

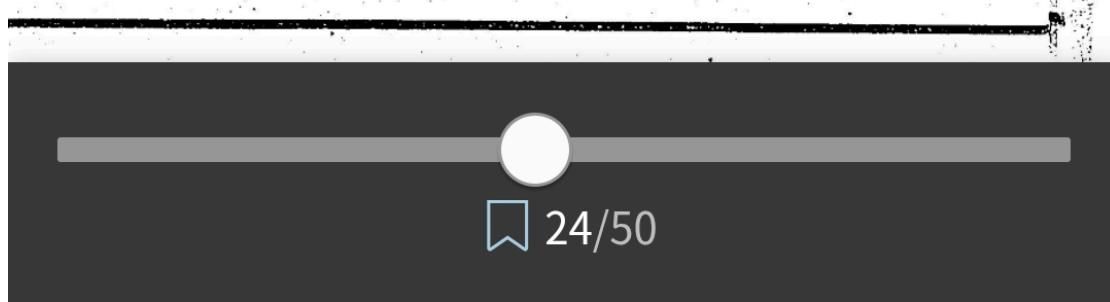




● → (皇后亮) 宣孝→ (左京大夫) 隆光→ (中宮潘 大進 左中) 隆方→ (參議  
坊城大蔵卿 勸修寺) 爲房→ (長男) 爲隆、次男 (松室) 實譽→ (興福寺) 覚實  
→ (興福寺) 覚覩 (46項、国会図書館デジタルコレクション有り、出版者出版年  
月日1903-1904吉川弘文館請求記号288.2-To388s書誌ID000000893848) [国会図書  
館へ](#)







●橋本 故実叢書 尊卑分脈（洞院公定）（25項、国会図書館請求記号請求記号  
192-55書誌ID000000430888）

[国会図書館へ](#)

⇒ [dl.ndl.go.jp/pid/11](http://dl.ndl.go.jp/pid/11)

+





16/77

●良信(一乘院,後発志院)：門跡伝（4項、国会図書館デジタルコレクション有り、  
請求記号HM91-15書誌ID000001374695）

[国会図書館へ](#)

⇒ [dl.ndl.go.jp/pid/11](http://dl.ndl.go.jp/pid/11)

+



橋爪本	フミノセ二維次
鏡圓	フ六ノ二實俊、四二
鏡冠者	ヘ一六ノ三二行賀
鏡	ケ一一ノ二九定重、全
鏡齋藤六	ケ九ノ八二
鏡作上祖石凝命	ケ九ノ一六重義
競場	フ四ノ一〇〇以家
要	ケ九ノ七九國頼、全
鑿	ケ九ノ七九光俊
鑿	ケ一四ノ四五
鑿	ケ二ノ五三爲守
鑿	ケ二ノ四一
鑿	ケ一五ノ二五
堯胤法親王	ケ一五ノ二五
堯圓	フ六ノ九四
堯惲	フ四ノ一八
堯快	フ四ノ一八
堯空	フ六ノ三三實隆

基義久久久久久久久久	ケ九ノ一〇六、高二九ノ二七
業義久久久久久久久久	フ二ノ一一〇
業教久久久久久久久久	ケ二二ノ一六
業證久久久久久久久久	フ四ノ一三、二四、ケ二五ノ四
業兼久久久久久久久久	二〇ノ三
業賢久久久久久久久久	フ四ノ一〇、ヘ二六ノ三、ケ
業兼久久久久久久久久	二〇ノ三
業賢久久久久久久久久	ケ九ノ一〇七、一一、三三ノ一
業賢久久久久久久久久	六、キ二〇ノ二九
業憲久久久久久久久久	フ七ノ五四、二〇ノ三
業顧王久久久久久久久久	ケ一五ノ四、二〇ノ三
業光久久久久久久久久	フ四ノ一〇、三〇、ケ九ノ一〇
業恒行康綱久久久久久久	七、一一〇、二二〇六八、五〇 九、二〇ノ三、ヘ二六ノ三 フ四ノ三、三三、高二九ノ二七 キ二〇ノ五全
業恒行康綱久久久久久久	フ二ノ一〇一、一一〇、一二一、
業恒行康綱久久久久久久	フ四ノ二四



●藤原北家鷹司 與大僧正 興福寺別當 良信（一乘院 覚昭僧正 正賓）（母 丹波夏基  
女冬平公）：新編纂図本朝尊卑分脈系譜雜類要集 第1巻 (故実叢書 ; 第3輯) (70項、  
国会図書館デジタルコレクション有り、請求記号288.2-To388s書誌  
ID000000893848)

[国会図書館へ](#)



藤原北家○麿司



後烟川院后嘉祥二七二女御  
中宮 同月廿九中宮

女子 長子

母修理大夫季信女  
安貞三四甘院號 麿司院  
文永十二二十一崩五十八

良信

寺 法務大僧正 三井寺長吏  
母同冬平公

大僧正 興禪別當

一乘院 覺昭僧正資

道珍

寺 法印權大僧都  
南淵院靜称資  
又道瑜僧正資如意守

尊基

法印權大僧都  
圓守僧正入室  
慈基資

慈兼

法印權大僧都  
聖兼入室

母 同聖忠  
与舍兄尊基同日入滅

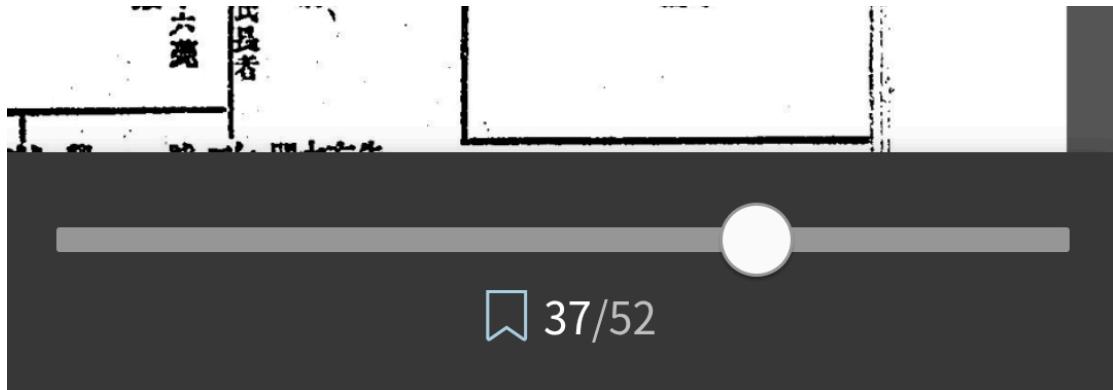
房平

牛車兵仗  
隨身  
左大臣左大輔  
从一

文明四十一  
號後昭光院殿

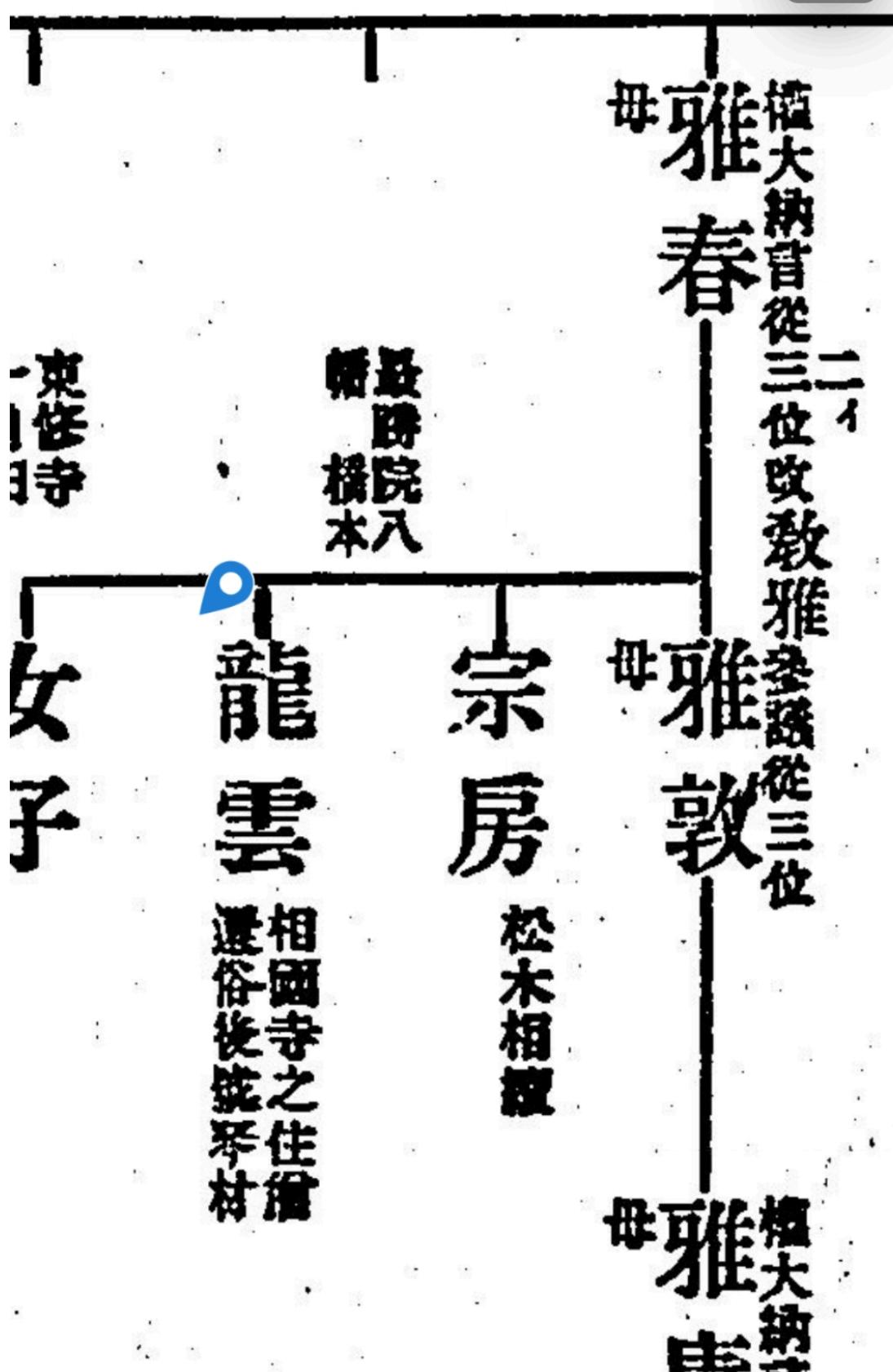
女子

母同  
大納言經輔母  
成恩寺關白室



●師實公流・飛鳥井→最勝院八幡・橋本龍雲（相國寺之住捨還俗後裝琴材）：新編纂図本朝尊卑分脈系譜雜類要集 第6巻 (故実叢書；第3輯) (101項、国会図書館デジタルコレクション有り、請求記号288.2-To388s書誌ID000000893848)

国会図書館へ



屏風  
二

52/56

## 4門跡伝

門跡伝

(183項、国会図書館デジタルコレクション有り、請求記号HM91-15書誌  
ID000001374695)

[国会図書館へ](#)

良信（後発心院）記載。

8:13



45 分

VoLTE 63



dl.ndl.go.jp/pid/25



# 後發心院

良信大僧正

圓

光

中

院

關

白

基

覺昭大僧正資

忠

号後清淨光院

女

男

8:13 🔍 ⚡ 45 分 ) ⚡ VoLTE LTE 63



dl.ndl.go.jp/pid/25

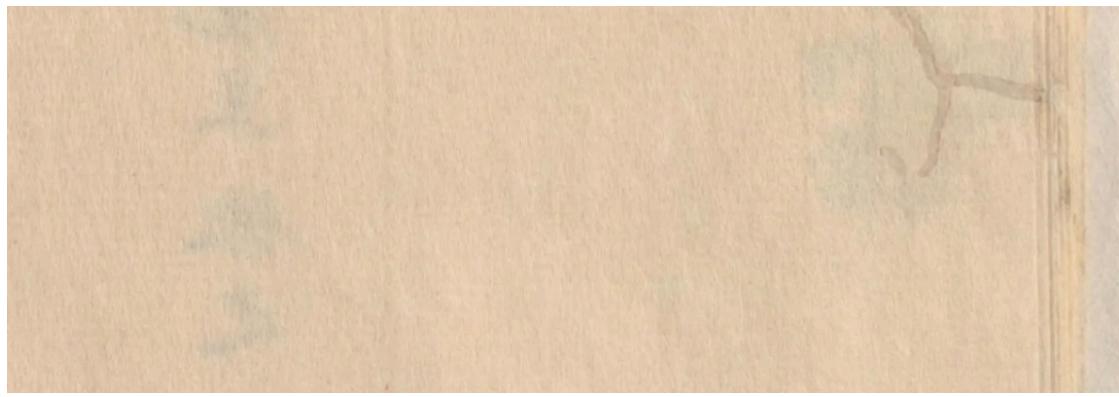


實靜少僧都

母猪熊 摄政家實公男

實信大僧正資

發心遁世



覚實（号後発心院）記載。

10:56



01:47:40

VoLTE 4G 76



dl.ndl.go.jp/pid/25



喜光寺

覺實大僧正

母岡本關白家平公男

良覺大僧正資

法務 喜光寺本願

元弘

正慶二年  
延元二年

三年六月十四日

二十八歲  
三十二歲

補興福寺

建武

四年六月十二日

四十一歲

還補別當

貞和

二年二月十七日

四十六歲

三補別當

觀應

二年五月十八日

四十六歲

寂

号喜光寺僧正

別當



13/76

10:56 R



01:47:51

VoLTE 4G 76



dl.ndl.go.jp/pid/25



超昇寺本願

徳治二年四月四日

補興福寺別當

同 年十二月廿二日

辭職

延慶三年三月十九日

還補別當

正和五年十一月十六日

三補別當

元亨三年八月十五日

四補別當

嘉曆三年七月十二日

寂

号後發心院

## 大乗院門主の概略（系譜・慣行）

---

### 事実

大乗院成立期に隆禪が堂塔を建立（寛治元年＝1087年に関する記載あり）。

継承の主要人物列：隆禪 → 頼実 → 尋範 → 信円 → 実尊 → 円実 → 尋覚・尊信・慈信等。

門主予定者は若年で門主の室に入る慣行があった。

鎌倉期の大乗院記録は断片的で、詳細は一部不明。

13:58 R



04:53:33

VoLTE 25



dl.ndl.go.jp/pid/25



發心院

實信大僧正

普賢寺攝改基通  
母

良圓僧正資

實尊弟子

大乘院兼帶箕川住寺 法

承元三年

月

日

入室得

度 势

男



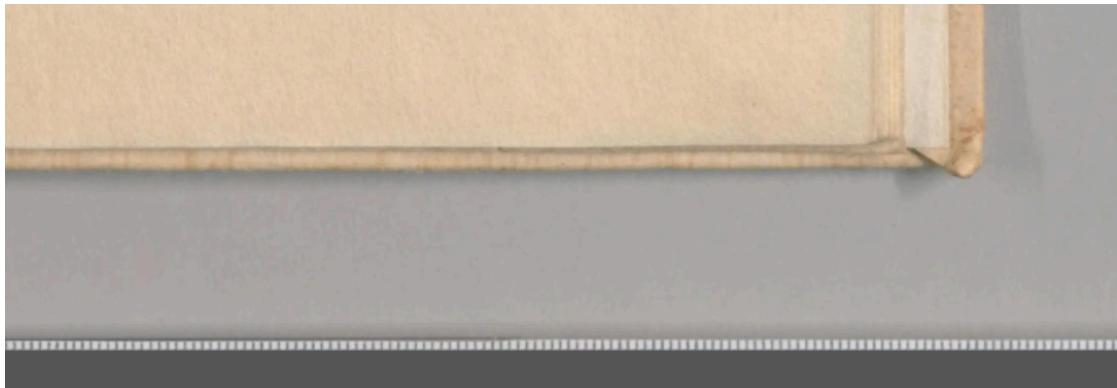
寛喜二年三月廿日 為興福寺別當  
天福元年三月廿七日 還補寺務  
寛元三年十二月二日 三補  
寶治二年十月二日 四補  
建長二年十一月一日 五補  
同四年六月廿三日 大乘院院主依  
ノ  
号發心院僧正又簗川僧正  
眞載之

之  
血



菩提山僧正

配流先是三月二日興福寺前別當惠信  
集徒欲殺別當尋範而房人相禦之間  
亡命者多禪定院大乘院松室等燒亡  
承安四年月日五十八歲自伊豆配所發歸京  
中途而寂



## 5人名・地名

人名・地名

大乗院寺社雑事記総索引上巻（人名編）（上巻）（223コマ、国会図書館デジタルコレクション有り、請求記号GB231-E1書誌ID000001910703）

[国会図書館へより引用→](#)

人名・地名（横田莊など）。

- 彦次郎は大和国横田莊の沙汰人であったとされる  
（『大乗院寺社雑事記総索引 上巻（人名編）』による）
- 大宮は伊勢国人であったとされる  
（『大乗院寺社雑事記総索引 上巻（人名編）』による）
- 大宮院は後嵯峨院中宮藤原嬉子で正応3年9月に亡くなったとされる  
（『大乗院寺社雑事記総索引 上巻（人名編）』による）
- 岡は一乗院家坊人や国民や郡司や大和国平田莊官であったとされる  
（『大乗院寺社雑事記総索引 上巻（人名編）』による）
- 岡部殿は大僧正や門跡や前僧正や禪師垣教や若君であったとされる  
（『大乗院寺社雑事記総索引 上巻（人名編）』による）
- 岡崎は十市代官や岸田被官であったとされる  
（『大乗院寺社雑事記総索引 上巻（人名編）』による）
- 岡部殿は大僧正や門跡や前僧正や禪師垣教や若君であったとされる  
（『大乗院寺社雑事記総索引 上巻（人名編）』による）
- 岡村は長谷寺であったとされる  
（『大乗院寺社雑事記総索引 上巻（人名編）』による）

- 岡本殿は近衛家平であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 興田は十市被官や越智代官であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 荻は実禪兄であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 奥は極楽坊前坊主であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 奥は新免住や新免田や石垣であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 奥西は伊賀人であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 奥林は山城国泊住であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 奥坊は長谷寺住や実印であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 桶井は古市被官であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 大納言律師は兼親や孝祐であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 順堯は実弘や発志院方であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 桶井は古市被官であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 訓専は春善房や西発志院であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 大夫は発志院やハシノ院であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 大夫寺主は人名の好実であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 大夫太郎は神人であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 大夫入道は西京火鉢作給主であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 大菩提院はページ数のみ  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 太郎は御童子、東金堂童子であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 太郎男は吉田法橋被官であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 太郎三郎は己心寺下人や中在家であったとされる  
(『大乗院寺社雑事記総索引 上巻 (人名編)』による)
- 太郎四郎は大和国苻坂油壳であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 太郎次郎は西御門居住であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 太郎次郎は大和国辰市小延郷住人であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 太郎丸はd左近次郎息で文明5年7月3日死亡e六丸孫や五郎次郎息や御童子や中院住f藤若息で明応8年6月9日死亡g郡使や大和国倉荘佃定使であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 秦九郎は明応7年10月2日死亡で指田秦九郎信次であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 藤五郎は中間であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 藤左衛門尉清氏は越前国河口荘寺門使や神人やや杉若であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 藤次郎は番匠や大工や中座や十市代官であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 藤次郎大夫は宇治猿樂であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 藤七は神人であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 藤寿は古市息であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 道円は大和国横田荘百姓であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 道慶は足利義政の法名であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 道英は宗円房子であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 道珍は大和国横田荘百姓であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 徳は奥発志院童であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 二条良実は普光園院殿や行空であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 二条良基は後普光園院摂政で元中5年6月13日死亡であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 二宮は斯波被官であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 二楽軒は人名で飛鳥井雅康であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 仁和寺宮永助親王は応永年間活動であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

- 西丹後公と西発志院と発心と発心院と西室大夫得業はページ数のみ記載されて

いる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●西室は東大寺や公惠や僧正や大僧正や東大寺別当であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●西殿は人名で鷹司西殿や人名で円海であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●西師順は御師であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●日尊は南朝方や後醍醐天皇末であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●発志院は小別当 (少別当) や菩提山発志院や禪徒であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●発志院は発心や発心院とも記載されていたとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●堀は辰市住であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●九条・九条頼嗣は摂家將軍であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●実尊は松殿太閤や藤原基房や息や後菩提仙で嘉貞2年2月9日死亡であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●実有は西発志院であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●俊円は東北院僧正や清水寺僧正で文明16年5月13日死亡没であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●彦次郎は大和国横田莊沙汰人であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●好実は王寺大夫や寺主や一条院坊官や法橋や上座で文明19年5月4日死亡であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●多田は京極であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●泰祐は相模南院であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●俊算は大安寺長老で文正2年2月死亡だったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●専円は縁識房であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●丹後公・殿・丹後庄・円英は横田莊下司であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●斯波高経道珍は大和国横田莊百姓であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻 (人名編)』による)

●円英は大和国横田莊百姓であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻（人名編）』による)

- コウトノは横田莊であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻（人名編）』による)

- 助は横田莊百姓)であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻（人名編）』による)

- せ井太郎は横田莊百姓であったとされる

(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻（人名編）』による)

- 左近は大和国田井莊間田百姓や済恩寺莊百姓や横田莊百姓や三条・権上座田百姓であったとされる

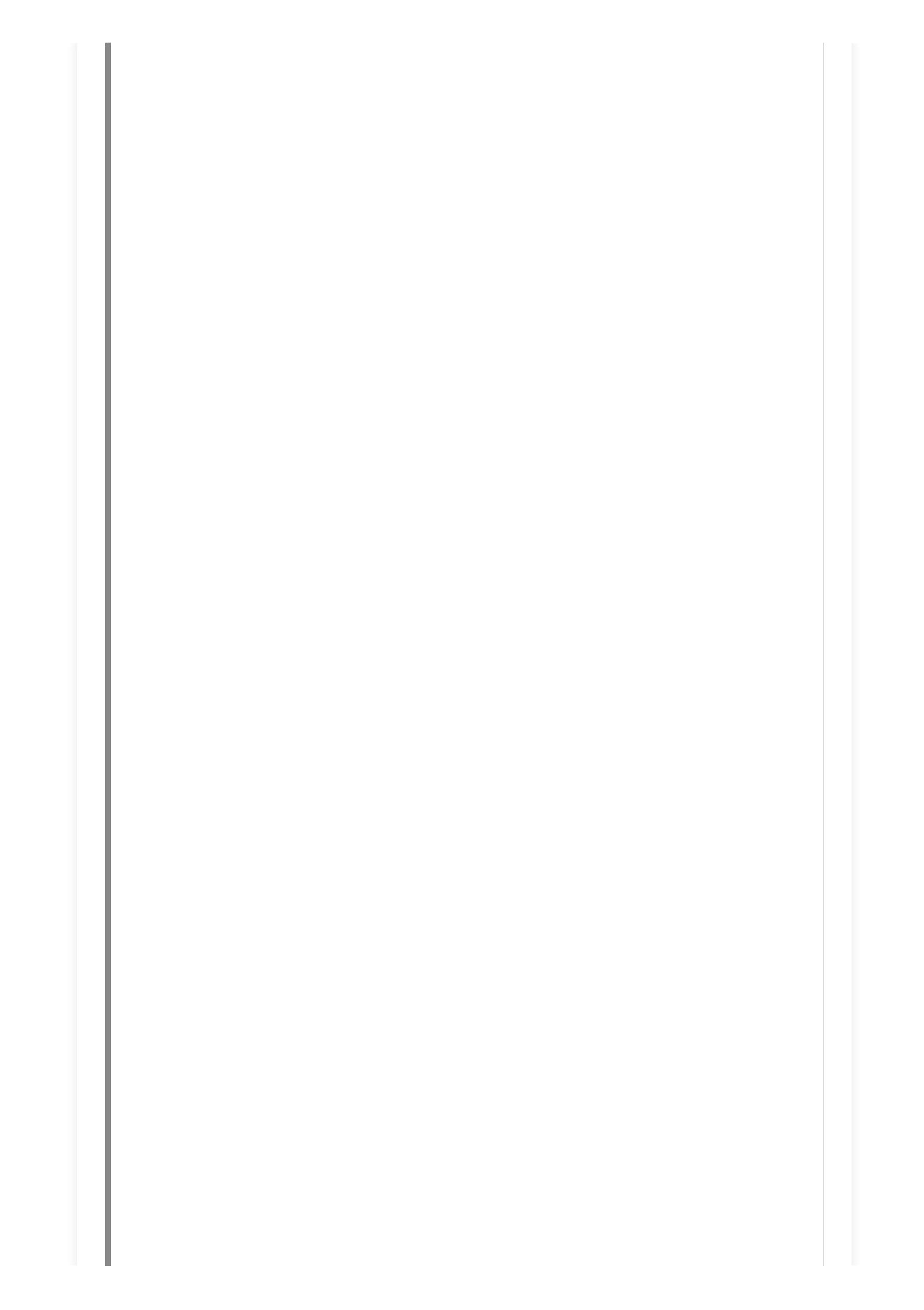
(『大乗院寺社雜事記総索引 上巻（人名編）』による)

- 良信は一乘院や後発心院であったとされる (『大乗院寺社雜事記総索引 上巻（人名編）』による)

## 6小別当(少別當)と発志院

「一於福田院久世舞勸進始之、少別當發志院沙汰也」との記載により、福田院における久世舞勸進の開始に際し、少別當(小別當)である発志院がその沙汰(実務処理・管理)を担当したことを示す。少別當は興福寺・大乗院における役職の一つであり、発志院がこの職務を担っていたことは、発志院が単なる末寺ではなく、大乗院組織内で一定の管理的役割を果たす院家であったことを証明する。発志院が大乗院の組織内で「少別當」という公的な役職を担い、福田院関連の実務を統括していた事実を示す重要な一次史料。

大日本史料 第8編之11 (1010項、国会図書館デジタルコレクション有り、出版年月日大正15請求記号GB22-7、[国会図書館のページへ](#)) より引用→一於福田院久世舞勸進始之、少別當發志院沙汰也、





福寺相撲

樂春日社  
金晴大夫福田院久  
世舞勸進

文明十一年雜載

一〇三〇

〔大乘院寺社雜事記〕

九十六 七月十九日、

之畢、

〔大乘院寺社雜事記〕

八十六 六月十一日、

一於福田院久世舞勸進始之少別當發志院沙汰也、

〔大乘院寺社雜事記〕

八十六 六月六日、

一今日金晴大夫於社頭法樂内々申、先日供衆能藝事、餘仁望申處、被仰付畏入面目也、爲御禮藝能事可沙汰、明日様可參候、幸座者共有之、近日事間斟酌也、悅入旨仰了、

〔大乘院寺社雜事記〕

九十六 七月廿七日、

一自昨日於福寺相舞撰始之、岩井川之社壇勸進、自古市申付云々、修學者以下見物了、

〔大乘院寺社雜事記〕

八十六 四月十日、

## 7実信(発心院)の記録

「承久元年講師權少僧都實信号發心院大僧正、或實川」との記載により、承久元年(1219年)に講師を務めた權少僧都實信が\*\*「發心院」と号した\*\*ことを明記。實信は近衛殿普賢寺基通公の息子であり、興福寺別当を務めた高位の僧侶。實信が「發心院」の号を持つことは、發心院(=發志院)が門跡級の高僧と深い関係を持つ院家であったことを示す。摂関家出身の實信が「發心院」と号したことにより、發心院(發志院)が公家・門跡と密接に結びついた格式ある院家であったことを証明する基礎史料。

實信

大乘院寺社雜事記 第6巻 尋尊大僧正記（232項、国会図書館デジタルコレクション  
有り、請求記号554-213書誌ID000000778530、[国会図書館へ](#)より引用→

承久元年講師權少僧都實信号發心院大僧正、或實川

13:58 R



04:53:33

VoLTE 25



dl.ndl.go.jp/pid/25



發心院

實信大僧正

普賢寺攝改基通  
母

良圓僧正資

實尊弟子

大乘院兼帶箕川住寺 法

承元三年

月

日

入室得

度 势

男



寛喜二年三月廿日 為興福寺別當  
天福元年三月廿七日 還補寺務  
寛元三年十二月二日 三補  
寶治二年十月二日 四補  
建長二年十一月一日 五補  
同四年六月廿三日 大乘院院主依  
ノ  
号發心院僧正又簗川僧正  
眞載之

之  
血



菩提山僧正

配流先是三月二日興福寺前別當惠信  
集徒欲殺別當尋範而房人相禦之間  
亡命者多禪定院大乘院松室等燒亡  
承安四年月日五十八歲自伊豆配所發歸京  
中途而寂



## 8発志院が惠印から大乗院に移った経緯

発志院が管理していた莊園が当初「橋院庄」と呼ばれ、後に横田莊と改称された経緯を詳述。「橋院」の名称が橋本家の由来と関連する可能性を示す重要な学術研究。

講座日本莊園史 7 (近畿地方の莊園 2) (153コマ、国会図書館デジタルコレクション有り、請求記号GB245-E5出版者吉川弘文館、[国会図書館へのリンク](#)) より引用

横田莊の来歴と院家領化の経緯『宇治拾遺物語』に登場する「藏人得業惠印」と書いた札のいたずらは、おそらく発志院の惠印を指すものであろう。発志院の院主の地位は鎌倉初期において、当初「橋院庄」と呼ばれていた当莊を含む院家領諸莊とともに、惠印からある人物へ譲られ、さらにその人物から大乗院実尊（松殿基房の子）へ伝わった。実尊は大乗院・龍花院・禪定院のいわゆる三ヶ院に加え、法積院や発志院などの院主職を兼ねていたが、嘉禎二年（1236）三月十九日に没する

（『春日社記録』）。発志院院主の地位は、実尊の弟子である円実（九条道家の子）に継承され、以後発志院院主は大乗院院主が兼帶する形となり、当莊は大乗院領へと組み込まれていった。やがて「橋院庄」の呼称は改められ、正式名称は横田莊となる。嘉元四年の検注では、大乗院の院主職は円実から尊信（九条教実の子）へ、さらに尊信から慈信（一条実経の子）へと受け継がれていった。正安元年（一三〇一）八月、慈信の弟子で大乗院の後継者である尋覚（一条家経の子、慈信の甥）が維摩会の講師を務める際、その費用捻出のために大乗院領諸莊に反別五十文の反銭が課された。このときの莊々注文には当莊について「横田ニ、廿三丁一反」と記されており（「文保元年七月日維摩会御講師間細々引付」）、当莊に課された門跡反銭の賦課田数が確認できるが、それ以外の詳細は不明である。嘉元四年以降の検注と基本台帳の成立 当莊についてより詳しい記録が明らかになるのは数年後のことである。嘉元四年（=徳治元年、一三〇六）から翌徳治二年にかけて、慈信は大乗院の末寺である菩提山正願院の承仕である印専・頼因に当莊および隣接する若槻莊の検注を命じた。辺郡の勾田莊でも徳治二年に検注が行われているが、勾田莊は本来正願院領であるため、これも印専・頼因による検注であったと考えられる。ともあれ、嘉元四年から翌年にかけての検注の結果、後年「本帳」と呼ばれる当莊の基本的な台帳が作成され、支配と収取の体制が確立された。検注取帳の作業は嘉元四年十二月一日に始まり、条里制の坪の順序に従って当莊の西北から調査が行われ

た。取帳には耕地ごとにまず田か畠かが記され、続いて面積、坪内での位置、耕地の所有者名、もし給田に指定されている田畠であればその旨が書き留められている。用排水路である「溝」を含む田畠についてはその分が控除され、負所田には負所名が記載された。実際には田であるのに畠と記される例もあるが、取帳は当時の耕地の状況や所有関係をほぼ忠実に反映した記録と評価できる。所有構成と荘民の分布 取帳を所有者別に集計・整理した結果（表1参照）によれば、当荘の田畠は四十八人によって所有されている。最大の所有者は末弘で、約三町二反余りの田畠を有し、最小は正道ら三人で九十歩を所有している。平均すると一人当たり約六反である。四十八人のうち、備考欄に○印を付した盛然ら六人は北隣の若槻荘にも耕地を持ち、その多くは若槻荘の荘民と見なされる。また△印を付した者たち（番条四郎・番条七郎など）は名前から西の番条荘の、箕田一郎は東隣の箕田荘の荘民であったと推定される。したがって、取帳に記された横田荘の実際の荘民数は約四十人と考えられる。土帳と景観の復元 取帳と並んで、荘全体を俯瞰するための土帳が作成された。土帳は縦横に線を引いて条里制の坪を示し、坪内の地割りを簡潔に素描した絵図であり、これにより当荘の全体像を鳥瞰できる。取帳・土帳を基に、1974年当時の現況を考慮して当荘の景観を復元したものが図1である。以下では、これらの諸帳を提示しつつ当荘の構造を概観していく。

## 9橋之院衛門九郎と大夫

明応六年(1497)の横田荘年貢米記録に、\*\*「橋之院(ハシノキン)衛門九郎」「橋之院大夫」「橋之院七郎」\*\*という複数の人物が記載され、発志院関係者が現地で年貢管理の実務を担っていた決定的証拠。

大乗院寺社雜事記 第11巻（明応六年）（123項、国会図書館デジタルコレクション有り、請求記号210.46-D18-T書誌ID000001062235）

[国会図書館へ](#)

より引用→廿九日

一屏風二双帳事専祐仰付之、

一人夫南方辰巳土上之・

一屏風二双ノ(夕直帳之、障子紙二東之内十二、・帖・障子六帖式タナフシ、合四東二帖也、

一横田庄公方御米未進駄沙汰人注進之・給主取

進之、去年辰分、

一石五斗一升八合 タンコトノ

二石八斗二升七合 ミタトノ

四斗五升四合 コウトノ

二石八斗 (ヨシオカ) チフ

五斗五升四合 (ハシノキン) 衛門九郎

合九石一斗九升五合 (ハシノキン) 大夫

二斗二升六合 ハシノキン七郎  
四斗六合（ナカンシヤリ）四郎  
4石六斗沙汰仕分  
合九石一斗九升五合  
四石六斗沙汰仕分  
二月廿五日 サタ人  
以上利分一石三斗二升  
都合十二石七斗二升

## 10橋本屋敷焼失記録

永禄十年(1567)の戦乱で\*\*「橋本屋敷」\*\*が焼失した記録。16世紀中葉に奈良の地に橋本という屋敷が実在した物的証拠。

永禄十年橋本屋敷焼失。

多聞院日記 第2巻 (22項、国会図書館デジタルコレクション有り、請求記号  
210.48-E38t-T書誌ID000000723487)

[国会図書館へより引用→](#)

永禄十年七月

八日、今日迄一七日塩斷了、日中飯ニ妙徳院衆各申入了、  
一從小坂按西モトコ一桶來了、  
一城戸禪門ヨリ鈴一對・茄子・枝マメ、福善ヨリ麻瓜十來了、  
一古市方多聞山〈重歸了、付之發心院へ新發意儀付、從三人衆申事在之、映止此  
こ、  
九日、成身院ヨリ醤誂之間、二日ヨリ子サセ、今日可入之通申付了、麥一斗・塩  
三升・マメ三升、破木三束來了、水ハ八升入了、  
一七晝夜今曉卯刻迄也、結願了、  
十一日、退出了、古市郷燒拂了、孫來、翌日歸了、  
十日、广界廻向、社參了、大乘院家之内安藝父死去ニ付、香典雖遣之被返了、藤  
六被上了、  
十一日、退出了、古市郷燒拂了、孫來、翌日歸了、  
十二日、來五日貞乘房律師母儀卅三年之間、千部經此間執行供養、爲追善講問事  
願春房被申來了、安養報起にて可沙汰之通申遣之、  
一ソキ十四束好社頑松屋へ預ケ了、此内四束八月八日、取了、  
一角振与四郎より蓮之根來之間三学院へ遣之、  
一安養報起抄近・古十四帖明禪房二借之了、

一十疋大木子息多聞へ等春=遣了、引違也、若先  
一天下一与三郎へ二百六十文未下ノ内百六十文且遣之、ノコリ百文并四十文ノソ  
トノ代、合百四十文未下也、  
一下部二人へ十疋、下行、八郎・禪門へ十疋百四十文未下也、遣之、  
一大豆八斗弥七所へ預ケ了、  
十三日、刁剋之始より卯半迄、今御門・餅飯殿・橋本・角振小西大略焼了、多聞  
衆より放火云、淺猿爲躰也、  
一成身院謎之齧出來間遣了、  
一惟共道不通之間、是ニテ洗濯了、

12:22 R LINE

VoLTE 5G 64



dl.ndl.go.jp/pid/12



日の糒袋遣之、

一天下一与三郎へ二百六十文未下ノ内百六十文且遣之、ノコリ百文并四十文ノソトノ代合(ハ脱カ)百四十文未下也、

一下部二人へ十疋ツ、下行八郎禪門へ十疋ツ

、遣之、

一大豆八斗弥七所へ預ケ了、

十三日、刃剋之始より卯半迄、今御門餅飯殿橋本

角振小西大略焼了、多聞衆より放火云々、淺猿爲船也、

一成身院逃之醫出來間遣了、

一帷共道不通之間、是ニテ洗濯了、

十四日、靈供備進、羅漢供持齋如常、少太(脱アルカ)各矢田へ

詣了、鳥見谷西京邊ハ満作之由也、論一ヨリ五迄讀之、鈴一對連宗ヨリ來了、

十五日、六道講修之、靈供羅漢供如常、法花同音圓春深宗連宗(三カ)一人にて修之、捧物三疋ツ、一妙德院へ赤飯一重進上、社參了、論六ヨリ十迄

兩日一部讀了、

一伊圓ヨリ先年アツカルタシノ事、實乘坊ヨリ被申間、北空春辰へ遣之、

十六日、爲祈雨於新藥師心落論在之、出了、六十人余出仕、日中後(會力)令合談義了、

十七日、論へ出了、日中飯北坊設了、中將殿へ傳へ寺内へ破符遣之、不入由被申被返了、日中後會

合談義在之、

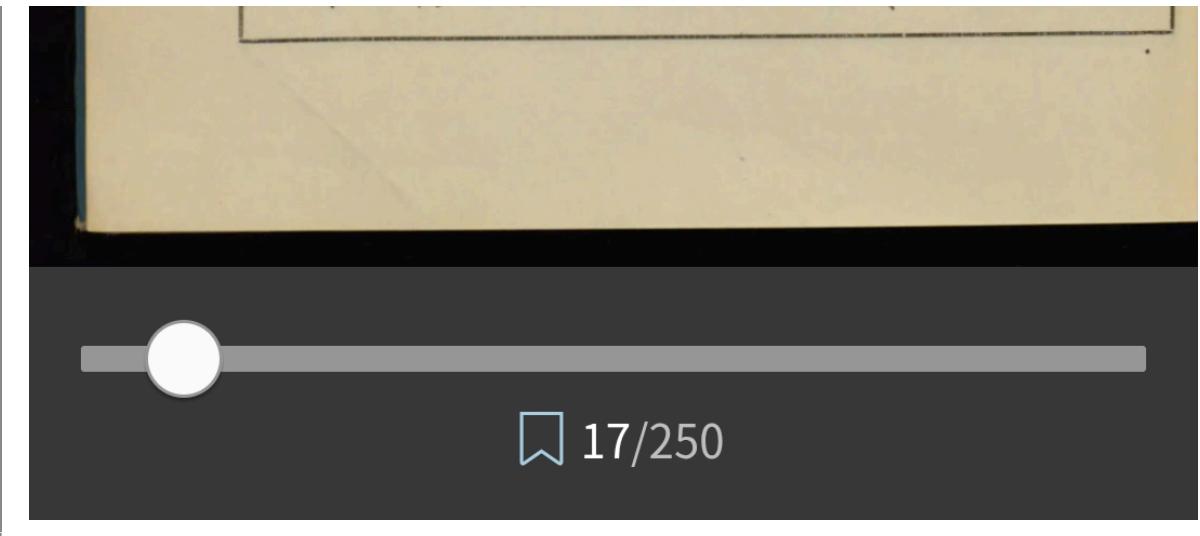
十八日、長賢房ハ父謨氣爲見舞、少二郎助二郎召具田舍下了、論へ出了、

立待月沙汰之、初夜之時分奉拜了、普門品卅三卷讀了、會合談義在之、

十九日、會合談義沙汰之、及夕大雨下了、宗五郎上了、花嚴院講問之表白諷誦文新調之了、

廿日、爲祈雨於一切經御廊重難十講在之、互爲問答也、專勝房得業ト對面了、大根まき了、

廿一日、本談義參籠了、讀堯香房得業予明禪房、今曉又大雨下了、



## 11西ハシノキン

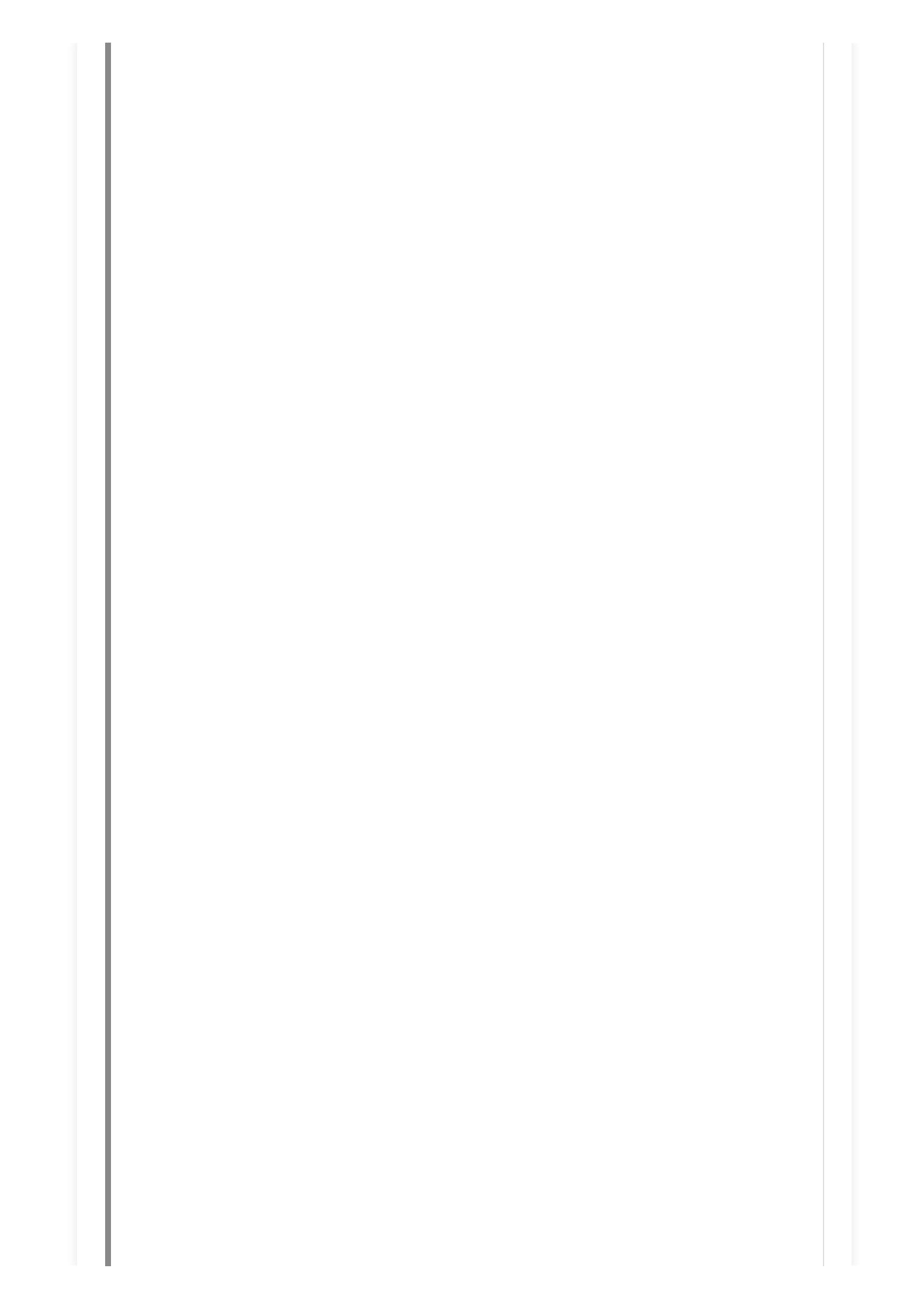
元亀三年(1572)に\*\*「西ハシノキン(西橋之院)」\*\*の信読が所沙汰を担当。表記揺れ(ハシノキン=橋之院=発志院)を確認できる重要史料。

多聞院日記 第2巻(巻12-巻23) (307項、国会図書館デジタルコレクション有り、請求記号640-324書誌ID000000723487)

[国会図書館へ](#)

640-324

元亀三年十二月五日、西ハシノキン信讀依所沙汰之從早旦出了、雨下了、  
一、專識房悅酒ノ麵百五十把取上了、代一貫五百文、錢ノ二百文目ツ、在之、源  
五郎持上了、  
六日、觀禪院二五師設在之、不出、  
七日、成身院・妙德院・妙音院・知足坊三學院來談、及晚被歸了、





十四日如御院

行慶

事

參賀同道、大乘院門徒參了、

樽二荷三種マニシニヤク廿丁遣之、

廿五日、連實房礼ニ來了、一荷牛房アヲノリ・八木一石

被持了、

一油五升七斗五升渡了、口入陽教房、

廿六日、戊申、社參了、

廿七日、備前ヨリ人上之間、ワキサシ高直ノ間返

了、一日雨下、甘雨也、珍重ミミ、

一蓮成院甚四郎死了、延順房喜三郎昨日カ死了、

愚身ヨリ若キ衆歟、淺猿ミミ、今明不知、乍去五

百八十年ト愚意、扱もく、

廿八日、ケコンキン一廻一瓶兩種ソトハ持了、講

問在之、講專禪房、問者予、題大乘無超地、ワニノ

宿ヨリ備タチノ米フセ五斗・サツシソク來了上了、マコ介釜口三昧田

へ催促ニ下了、河權入藤六入へ草リ一足ツ、

音信了、

廿九日、於蓮成院方之逆修在之、導師懃之了、

之堺ニテ深慶子甚五郎逃來了、代六斗・タチ  
五升、合三百廿五文ニ當、  
晦日、米ツカセ了、禪門少三郎・マコ六來了、

## 十二月大

一日、吉田經參了、仁王講參了、妙ヘハ用今日不  
了、

一釜口ヨリマコ介上了、

一綾七百文ニテ一丈八尺ヲ六十文目ヲリ來  
二日、成身院講竹林院、問者予、題滅定初起來日

正位有カ信漏善、講師實禪房、

三日、深宗先日之經營我執衆ヘ日中設了、飯半

ソ合力了、

一番条北圓堂供長賢房一口一石四斗支配、於

市ノ池田渡之、取ニ下了、

五日、西、シノキン信讀依所沙汰之、從早旦出  
雨下了、



## 12ハシノキン修正沙汰

天正六年(1578)、\*\*「ハシノキン」\*\*が正月法会の修正沙汰(実務運営)を担当。発志院が大乗院の重要な法会を運営する実務能力を持つ院家であった証拠。

多聞院日記 第3巻 (3項、国会図書館デジタルコレクション有り、請求記号210.48-E38t-Tk書誌ID000000871371)

[国会図書館へ](#)

天正六年正月十八日、大御堂修正出了、上七人也、専教房、迄御出了、餅卅枚在之、

一於大乗院轉讀大般若經在之、出了、六十人余被出了、

一日中後爲母儀大政所御見廻御上洛了、銀四枚渡了、

一ハシノキン修正沙汰之、餅八十枚被送之十五枚支配在之、  
午ノ日也、大導師沙汰之、三百文、フセ代六斗送之、出仕ニ斗ッ、在之、觀普繪像寶藏院ニテカル、餅五遣之、木像南井坊ニ借之、堯蘭上了、



十五日、粥如常、月十三鐘ノ過ニ明ニ山ヘ御入、一  
段珍重、五穀成就無疑、夜中ニハ大風吹了、

十余人雇信讀之、又六下了、

十六日、明王院報恩講不出、廿人計各來、悉讀了、大  
政所少甘故御上洛延引了、尤珍重、

ソケン五十メ入袖一服半、ハタ袖ヨリホソ物  
出ル、エリ五寸ニタツ、裳マルモ一丈二尺モノ  
ふるいて九寸、身袖ヲクヒ四尺三寸ツ、ニタ  
ツ、ハタ袖九尺ニ取了、エリノマハリノ用也、身  
ノふるいてたて三尺五寸五分也、あやノけさ

八尺五寸、代一石、ホタクサ、大きニふるわ  
せ了、ぬいちん一斗、ソケンハ絹ノ代一石八斗  
五升、テマ一斗二升、以上三石七升入調テ、門跡  
へ上之畢、

一去十四日、箸尾筒井入魂ノ礼於中坊在之、  
一龍王城今日ヨリ破之云々、爲國尤珍重、  
一大乘院御内衆广尼珠院へ請用トテ、長賢房モ  
一出了、雪下了、

天正六年正月

一上權來了、

十七日、知足坊地藏講來了、來題聞言說、

大乘院殿ヘ明日之道具ワン・ヲシキ七流皿  
百引物皿五十ユツキミ跳子錠ニ具センタナ  
ニキヤク 調上了、

一小塔院ヘハカ參沙汰之、次ニ大乘院ヘ見廻了、  
十八日、大御堂修正出了、上七人也、專教房、迄  
御出了、餅卅枚在之、

一日中後爲母儀大政所御見廻御上洛了、銀四枚  
渡了、

ハシノキン修正沙汰之、餅八十枚被送之、十五  
枚支配在之、

午ノ日也、大導師沙汰之、三百文、フセ代六斗送  
之、出仕二斗ツ、在之、觀音繪像寶藏院ニテカ  
ル、餅五遺之、木像南井坊ニ借之、堯蘭上了、  
十九日、於觀禪院信讀經在之、出了、從曉大雨下了、

### 13橋院信長

文永十二年(1275)の春日社御遷座に\*\*「橋院信長房」\*\*が得業として参加し、重要神事の中心的役割を担った記録。橋院が春日社の神事にも関与する格式ある院家であった証明。

春日社記録 [第1] 第2 (284項、国会図書館デジタルコレクション有り、請求記号  
175.965-Ka558k書誌ID000000880843)

[国会図書館へ](#)

文永十二年五月  
二〇中臣祐賢記  
五月十四日 神主泰道  
神主泰道  
追申  
若宮神主殿同可令存知給候、謹言、

一今日十五日、了賢房五師榮俊、爲寺家御使關東へ立畢、爲御使下向成五師了  
云々、

一同日、神主泰道蒙寺之御免畢、寺家へ歎申故云々、但集會、未事切也、

一今夕酉剋、自衆徒被命云、今夜亥剋、御遷座可爲必定之由在之、  
御遷座次第、亥剋、  
大眾參社、自六道止貝了、於南門如例三度同ス、舞殿ノ自東第三間ヨリ僉儀在橋  
院信長房得業藝文兩惣官隨召テ勸寄庭中、祐賢、住吉明神邊ニ祇候、庭中ニ松明  
無之、遠例、社家所役次之由眾命粗雖有之、先例不候之由令申間、中網羅出テ二  
行取之、僉儀終之後、社司參御前、自脇戸參御寶藏、奉出御神寶之事正預祐繼、